

塩屋駅に着いた。

ホームに降り立つと  
潮騒、磯の香り  
そして、浜風。

僕の体が、そこにあるはずの  
見えない海の存在を認める。

駅を後にして、細い路地を進む。

谷合を縫うように、縫うように  
並ぶ商店の連なり。

この町に、住み暮らすみんなと  
振る袖をすり合いながら  
商店街を抜けると

山と海を繋ぐ、小さな川を渡る。  
海を背中に感じながら、坂を登る。  
そしてまた、川と出会い、また離れて

歩く。  
歩く。  
登る。

# 「塩屋借景の家」

## 海と山のすきまで

もう一度川べりに沿って、  
急坂を曲がれば、僕の家が見える。

今にも、港に漕ぎ出しそうな  
筏（いかだ）みたいなバルコンが  
下屋根に載っている。

それには、透明の屋根が掛かっている  
階上から空と星を眺めるのに、遮らない。  
昇る太陽も、お月さんも、よく見える。

僕らは、「階の窓を空窓」と言って  
バルコンを「空庭」と呼ぶこととした。

空庭からは  
今帰ってきた道は  
見えないけれど

須磨浦遊園のある山頂に  
展望台を認めることができる。

海はというと、  
小さい僕の目には映らない。

もしも  
パパとママより背が高くなれたなら、  
水平線や、淡路島も見えるかな。

空も、六甲山も、隣の屋根も  
みんな、塩屋借景。

谷合の人の営為を愛でる、  
空窓と、空庭テラス。



「塩屋借景の家」

